

身近に

市川三郷町立三珠中学校三年 丹沢 海斗

今年の夏休みに僕は、新たな出会いと素敵な経験をしました。それは、過去に罪を犯してしまった方とその方々を支える保護司さんと協力雇用主さんとの出会いです。予定では、母の知り合いの保護司さんとお話をするだけでしたが、保護司さんが、過去に罪を犯して刑務所に入っていたAさんも一緒に連れてきてくれました。初めは、少し戸惑いや不安だけでなく正直、恐怖もありました。でも、母は、全然平気そうに挨拶をし、握手をしていました。僕達兄弟の様子を感じ取ったのか、Aさんは僕達とは握手をしませんでした。そんな僕達を見て母が、

「すみません。」

と頭を下げ、苦笑いをしました。

「全然大丈夫ですよ。慣れていきますから。」

とAさんも苦笑いをしていました。そんな出会いと経験を通して、僕が学んだ事を書きたいと思ったので、このテーマにしました。

差別をするのはいけないということも、社会には色々な所で差別があって、様々な偏見があるということも知ってはいます。僕も差別や偏見はダメだと思うし、やらないと思っていました。自分には、あまり関係がない事かなとも思っていました。その僕の気持ちを聞いて、保護司さんが、

「自分はしていないって思っているけど、行動には出ていると思うよ。だって君、Aさんと握手するのためらったよね。」

と言われた時、僕はハッとしました。そうです。その時、自分がAさんに対して差別と偏見を向けていたことに気づきました。その僕の顔を見て保護司さんは、

「そう。どうしても犯罪を犯したことがある人という思いになるよね。大人の僕達だってあることだけど、自分には関係のない事って思っている事でも実際には大きく関わっているんだと思う。」

とうなずきながら教えてくれました。Aさんは、過去に確かに罪を犯してしまったけれど、刑務所に入り反省をし更生して今では働いているのだから、何ら僕達と変わらない人なのだという事、自分は差別も偏見もしないと思っていたのに、Aさんに会った時、僕達は偏見の目で見ていた事に気づいたのです。待

ち合わせの部屋に入った時は、男性の方が三名と女性の方が一名で、みんな普通の大人の方だという印象しかなかったのに、自己紹介で過去に過ちを犯した人だとわかった瞬間僕は、『え！怖。』って思いました。だから、握手をするのはいやだなと思ったのです。それはよく考えると偏見ではないかという事です。言われてから気づくなんて、僕はAさんに申し訳ない気持ちでいっぱいでした。だから、母が謝り、Aさんは慣れていると言った事も、よく考えたら、わかったことじゃないかと僕は自分に腹が立ったのです。約二時間ほど、四人の方からお話を聞かせて頂きました。あつという間の二時間でしたが、とっても素敵な二時間になりました。お別れの時には、僕から握手をし、また会う約束もする事が出来ました。この出会いの中で沢山の、心に残る言葉がありました。その中で、僕達兄弟の心に特に印象的だった言葉を書きたいと思います。Aさんの、

「僕は過去に犯した罪を消したいと思う気持ちはないんだよ。だって僕が一生背負っていかなきゃならない事だから。だから差別も偏見だってあって当然だと思う。」

そして保護司さんの、

「私たちは、罪を犯し反省し更生しようがんばっている人達を信じているんだよ。だれかが信じてあげなきゃではなく、僕が信じていたいんだ。立ち直ろうとがんばっている人達の勇気と希望になれたらいいなと僕は思うんだ。」

協力雇用主さんの、

「確かにAは、悪い事をしたし、反省するぐらいなら後悔するぐらいなら初めからするなよって思うよな。でもAの周りには止めてやるヤツもAを助けてやるヤツもいなかったんだよ。まあだからと言って罪を犯していいわけじゃない。だから、今しっかりそれを俺たちがしなきゃなって。Aは今後も『元犯罪者』っていうレッテルを一生貼られる。でもそんな社会にはしたくないよな。」

この三人の言葉はそれぞれ違いますが、この社会を少しでも良くしていきたい、犯罪で苦しむ人や罪を犯して苦しむ人が少しでもいなくなりますようにと願っているのだとわかりました。初めに書いた僕の気持ちが少し変わりました。確かに犯罪はいけない事で、それは変わらないけれど、過ちだと気づき、反省し立ち直ろうとしている人に向ける差別や偏見も同じように過ちなのだと、みんなが気づかなくてはいけないと思います。そして差別や偏見が、とても身近で起きてしまっている事にも、周りの人や社会が気づき、考えないといけない

と強く思いました。